能動態

現在形

未完了過去(線過去)

未来

1. 第二：b, bi, bu
2. 第四：a, e

完了

過去完了

未来完了

**命令法**

能相欠如動詞

不定法

**接続法**

ラテン語の動詞は三つの[法](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B3%95_(%E6%96%87%E6%B3%95)" \o "法 (文法))（直説法、接続法、命令法）と六つの[時制](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%99%82%E5%88%B6" \o "時制)（現在、未完了過去、未来、完了、過去完了、未来完了）、二つの[態](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%85%8B" \o "態)（能動態、受動態）、二つの数（単数、複数）、三つの人称（一人称、二人称、三人称）に応じて活用する。他に、[準動詞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%BA%96%E5%8B%95%E8%A9%9E" \o "準動詞)として[不定詞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8D%E5%AE%9A%E8%A9%9E)、[分詞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%88%86%E8%A9%9E)、[動名詞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%95%E5%90%8D%E8%A9%9E)、[動形容詞](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%95%E5%BD%A2%E5%AE%B9%E8%A9%9E)がある。これらはすべて、動詞の4基本形に基いて作られる。

ラテン語の殆どの動詞は規則動詞である。規則動詞には第1変化動詞（-āre）、第2変化動詞（-ēre）、第3変化動詞（-ere）、第4変化動詞（-īre）の四つに識別される。

本節で扱うのは、主に動詞類に関係する文法範疇である。時制(tense)を示す言語形式である。しかし、客観的事象としての時が文法範疇としての時制によって標ぼうされる過程では複雑な変容を遂げるから、両者の関係は単純に対応してはいない。

　時制を現在・過去・未来の３種類に分けるのは、伝統文法以来の一般的な方法であるが、三つの時制が言語形式上普遍的に示される、などと考えてはならない。おのおのの言語は、連続する時間を独自の仕方で区切り、独自の時制体系を作っている。例えば、ゲルマン語派(Germanic)・スラヴ語派(Slavic)の諸語では、過去(past)と非過去(non-past)の二つの時制が基本である。ロマンス語派の場合、現在・過去・未来の三つの時制が伝統的に認められているが、実際は過去・非過去・無時間という時制にする方が、妥当と思われる。中略。

時制、相、法、態